

早引節用集の成立

高 梨 信 博

はじめに

易林本節用集をうけた近世節用集の流れを項目検索の方法という点からみると、近世中期に至るまで、その主流をなしたのは、まず頭字によってイロハ以下の各部に至り、つぎに各部のなかで意味に応じて乾坤・時候などの門に至り、それらの門のなかで求める項目をたずねるといふ、古本節用集以来の方法であった（以下、この項目検索法を部門引きとよぶ）。頭字のイロハわけ（部）と意味による分類（門）の適用の先後を逆にした、合類形式とよばれる節用集や、イロハわけを頭字のみでなく、第二目まで適用するものなど、項目検索にあつたな方法をもちいた節用集もあったが、それらはいずれも少数にとどまり、大きな流れを形成するには至らなかった。

宝暦二年（一七五二）刊の『新撰宝暦早引節用集』（以下、『早引節用集』と略称する）は、『早引き』というあらたな項目検索法によつた最初の節用集であった。これは頭字のイロハによって各部に至り、つぎに意味分類ではなく、かな見出し（項目の右横にかなで示さ

れた見出し語形）の字数によって分類された項目のグループに至り、そのなかで求める項目をたずねるといふものであった。この早引きという項目検索法は、近世中期以降の節用集のなかで大きな地位をしめることとなり、多数の早引節用集が出版された。

本稿では、早引節用集の出発点となる宝暦二年刊の『早引節用集』について、その成立事情を確認して近世節用集史上における位置づけを考えるとともに、部門引きから早引きに至る項目検索法の変化のもつ意味をたずねたい。

『新撰宝暦早引節用集』の伝本と書誌

『早引節用集』の概容については、関場武氏による紹介もあり、ここでは簡略な記述にとどめたい。

『早引節用集』の伝本として、『国書総目録』には山田忠雄氏所蔵の一本があげられているのみであった。現在までに筆者が調査できたのは、東京学芸大学附属図書館（望月文庫）所蔵の一本のみである。この望月文庫本は、『東京学芸大学所蔵望月文庫目録』（一九六七年）におさめられていたものであるが、近年、『古典籍総合

目録』（一九九〇年）にも登録、紹介された。『古典籍総合目録』では、『早引節用集』の伝本として、望月文庫本のほかに金沢市立図書館（村松文庫）所蔵の一本をあげている。この村松文庫蔵本については直接に調査する機会がえられていないが、嘉永二年（一八四六）刊とされ、別称も『増補改正早引節用集』とあって、早引節用集』の一本と認めるには疑問がのこる。

以上のほか、前記の関場武氏の論文中には『早引節用集』の巻頭の写真が掲載されているが、〈資料は、特に断らない限り手許のものを使用した〉とあるので、関場氏の御所蔵のものと思われる。

これまでに原本の調査をおこなうことができたのは望月文庫所蔵の一本のみであり、現在の段階では、版種の問題について特にのべるべきことはない。

ここで望月文庫所蔵本について書誌的事項をまとめておく。

函架番号 T1/11/65

書型

小本、一冊。一五六×八七ミリ。通常の小本の大きさよりも横がややみじかく、書型としてはたてながに見える。なお、横本ではない。

表紙

鏤色。雷文と唐草をくみあわせた紋様がある。題簽はない。

内題

〔宝曆はやびせちうし、新撰早引節用集〕

匡郭

四周単辺。一四三×六九ミリ（本文一丁表）

柱刻

序・凡例で、〈序一〉・〈序二〉。本文で、〈乙〉・〈百三十終〉。各葉裏側上部に部名を表示するかなを付す。なお、丁付けのとびや重複はない。

紙数

全一三二丁。うち、巻頭の序・凡例が二丁、本文が一二六・五丁、巻末の付録が三・五丁。なお、表紙見返しに目次にあたる〈丁附合文〉があり、後表紙見返しに奥付がある。

行数

後半葉有界五行（本文）。

序

〈壬申之秋 據梧散人題〉

刊説

〔寶曆二壬申初冬吉旦／江戸通本町 西村源六／大坂心齋橋順慶町 澁川與市／同心齋橋安堂寺町 村上伊兵衛〕

見出し語形を示すかな見出しはひらがな、対応する漢字表記を示す漢字見出しは行書体である。漢字見出しに楷書体を並記する真草二行の形式ではない。項目数は一一二〇四項目。

『早引節用集』の伝本が多くないことは先にのべたとおりであるが、これは、本書が宝暦七年（一七五七）には若干の内容の変更を加えて、『増補早引節用集』として刊行されたことによるものと思われる。『増補早引節用集』は、このち江戸時代末まで版をかさね、現存の伝本も多い。多少の項目の増減はあるものの、書型や記載様式などのすべてにわたって『早引節用集』にきわめてよく似ており、『早引節用集』は、いわば『増補早引節用集』に書名をあらためて改定再版されたものといえよう。

編纂の方法

項目検索法を別にすれば、『早引節用集』が先行の近世節用集と大きくことなるものではないことは、その所収項目を通覧すればあきらかである。『早引節用集』は、まったく独自に編纂された

ものというわけではなく、先行の近世節用集によっている可能性が大きいと考えられる。その際、参考になるのは、『早引節用集』の項目配列に意味分類のあとが明瞭に残されていることである。乾坤・時候といった分類上の名目を立てることはしていないが、それに相当する項目の類別があることは歴然としている。たとえば、イ部のかね見出し四字の項目について、部門引きの節用集における意味分類をあてはめれば、つぎのように配列されている。

盃 <small>いさ</small>	(3ウ2)	一 <small>いち</small> 忽 <small>く</small>	(6オ4)	言語
古 <small>いにしへ</small>	(6オ4)	十六 <small>いそ</small> 夜 <small>ひ</small>	(6オ5)	時候
陰陽 <small>いんやう</small>	(6オ5)	五十 <small>いそ</small> 嵐 <small>らん</small>	(6ウ2)	乾坤
石突 <small>いしづき</small>	(6ウ2)	一 <small>いち</small> 印 <small>いん</small> 金 <small>きん</small>	(6ウ4)	器財
位官 <small>いゝくわん</small>	(6ウ4)	一 <small>いち</small> 学 <small>がく</small>	(6ウ4)	官位
隠元 <small>いんげん</small>	(6ウ4)	一 <small>いち</small> 逸 <small>いつ</small> 民 <small>みん</small>	(7オ1)	人倫
頂 <small>いん</small>	(7オ1)	一 <small>いち</small> 心 <small>しん</small> 端 <small>たん</small>	(7オ1)	支体
繰 <small>い</small>	(7オ1)	一 <small>いち</small> 煎 <small>せん</small> 豆 <small>とう</small>	(7オ2)	服食
醬梨 <small>いんげり</small>	(7オ2)	一 <small>いち</small> 菌 <small>いん</small> 陳 <small>ちん</small>	(7オ3)	草木
鱈 <small>いし</small>	(7オ3)	一 <small>いち</small> 石 <small>いし</small> 蟹 <small>がい</small>	(7オ5)	気形

このような意味分類のあとは、少数のでいりはあるものの、『早引節用集』の全体をとおして、きわめてよく維持されている。これは、『早引節用集』が部門引きの節用集を改編して成立したことを示すものであろう。右に例示したような『早引節用集』の項目配列からみて、これが依拠した節用集における門の種類とその順序は、つぎのようなものであった可能性が高いと考えられる。

言語	時候	乾坤	器財	官位
人倫	支体	服食	草木	気形

現存の近世節用集のなかで、このような門立てをおこなっているものとしては、寛延三年(一七五〇)刊の『蠡海節用集』と、寛延四年(一七五二)刊の『字典節用集』、『広益字典節用集』がある。この二つの節用集には密接な関係がみとめられ、『字典節用集』は『蠡海節用集』より一割ほど項目がすくないが、全体として、所収項目とその配列は、よく一致する。両者のちがいは、『蠡海節用集』の漢字見出しが行書体のみであるのに対し、『字典節用集』では楷書体を並記した真草二行であること、それにともない漢字見出しに対してかな見出しとことなるよみを付記した两点とされていることである。つまり、『字典節用集』は『蠡海節用集』の真草二行・两点版というべきものである。

このような両者のちがいをふまえて、これらの節用集と『早引節用集』を比較すると、『早引節用集』は、基本的に『蠡海節用集』を改編することによって成立したものであると考えられる。すなわち、若干の例外はあるものの、『蠡海節用集』の所収項目を、イロハ以下の各部ごとに、出現順にかな見出しの字数によってふりわけていけば、『早引節用集』の項目配列ができあがるのである。『蠡海節用集』の門立てに応じて、『早引節用集』の項目配列にも実質的に意味分類のあとがのこされることはいうまでもない。

『蠡海節用集』との対照から

右にのべたように、『早引節用集』は『蠡海節用集』を改編することによって成立したものと考えられる。両者の関係を直接的なものとは断定してよいかどうかについて、決定的なきめてがある

わけではないが、その類似度の高さや刊行年の近さからみて、現時点では、直接『蠡海節用集』によって『早引節用集』が成立したのと考えておきたい。

『蠡海節用集』と『早引節用集』の關係を示すためにこれ以上の具体的な例をあげることは、本稿では省略する。むしろ、両者が基本的にはきわめてよく類似するにもかかわらず、やはりそのあいだに若干のちがいがみられることをとおして、そこに部門引きと早引きという項目檢索法のちがいがどのように反映しているかについて確認しておきたいと思う。

『早引節用集』が『蠡海節用集』を改編して成立したものと考えたとき、『早引節用集』には、少数ながら、この原則に反するとみられるところが含まれている。それは、大別すれば、つぎの三種にわけることができる。

1. 項目の配列
2. 対応する項目の語形
3. 項目の有無

1の〈項目の配列〉とは、『早引節用集』が『蠡海節用集』の項目を各部ごとにかな見出しの字数に応じて出現順にふりわけていったものと考えたとき、『早引節用集』における項目配列のなかに、予想される順序と一致しないものがあることをさす。配列変更のある個々の項目について、その理由をあきらかにすることは困難であるが、このような現象は、『二鉢節用集』『真草二行節用集』『頭書増補二行節用集』といった、易林本節用集を直接ひきついで近世前期の部門引きの節用集のあいだにも広くみられるところである。

2の〈対応する項目の語形〉というのは、配列順からみて『蠡海節用集』と『早引節用集』とのあいだで対応關係が確認される項目間において、かな見出し、または漢字見出しの語形にちがいのあるものがみられることをいう。認定の基準によって多少のちがいは生じるであろうが、このような項目は概算で百項目ほどであり、つぎのような例が含まれている。

かな見出しのことなるもの

廃忘 → はいばう
一昨年 → をとゝし

樵 → かへ

商人 → あきうど
仕合 → しあはせ

漢字見出しのことなるもの

無得 → 無得手

悴 → 世悴

器物 → 器

尚侍 → 内侍
身方 → 味方

このような〈語形のゆれ〉も、程度の差はあれ、直接の系統關係をもつ近世節用集の対応項目のあいだにみられるものであり、特に部門引きと早引きという項目檢索法のちがいによって生じているというわけではない。

3の〈項目の有無〉は、『蠡海節用集』と『早引節用集』のいずれか一方のみにみられる項目があるばあいである。『蠡海節用集』になくて『早引節用集』にある項目を増加項目とよび、逆に

『蠹海節用集』にあつて『早引節用集』にない項目を削除項目とよぶとすれば、これも基準のとりかたによつて多少の変動はありうるが、増加項目が約四五〇項目、削除項目が約二四〇項目となる。このうち、増加項目については、『早引節用集』が『蠹海節用集』以外の節用集を参照している可能性あることを示すといえるが、以下にのべるように、部門引きと早引きという項目検索法のちがいが関係していると考えられるものが多いのである。

増加項目のうち、全体の半数ちかくにあたる約一九〇項目は、かな見出し一字の項目である。『早引節用集』の総項目数一二一〇四項目のうち、かな見出しが一字の項目数は二六九項目、すなわち『蠹海節用集』からひきついだ項目約八〇項目に対して増加項目が約一九〇項目となるわけであり、これはあきらかに特異なかつたよといつてよい。『早引節用集』のかな見出し一字の項目は、たとえば千部ではつぎのとおりである。

持^ぢ勝^{しょう}負^ふ 痔^ぢ尻^{しつ} 乳^ち女^{にょ} 血^ち地^ち土^ど 千^ち 知^ち 同^{どう} 遅^{おそ} 治^ち

このうち、『蠹海節用集』からひきついだのは〈持〉〈痔〉の二項目のみであり、〈乳〉以下の七項目は『早引節用集』の増加項目である。〈遅〉のように、通常、単独で語をなすとは考えにくいものを多く含むことも、かな見出し一字の増加項目の特色といえるが、部門引きの節用集では、このような項目が立てられることはなかつたであらう。早引節用集におけるかな見出し一字の項目のもつ意味については断定しがたいが、かな見出しの字数に応じて項目が分類されるという早引節用集の性格を一つのきつかけとして、このような増補がひきおこされていると考えられるので

はあるまいか。

『早引節用集』の増加項目のなかには、『蠹海節用集』以外の節用集を参照したと思われるものがあつて、それをあきらかにすることも今後の課題であるが、他の節用集等によつたのではなく、『蠹海節用集』に含まれている項目をもとにして、部門引きと早引きという項目検索法のちがいを考慮し、関連する語形を見出しとする項目を別に立てているとみられるものがある。たとえば、『蠹海節用集』には〈揆起^{いっけい}〉という項目があるが、『早引節用集』には同じ項目のほかに、増加項目として〈二揆^{にがい}〉がある。このような関係を確認できる項目は、『早引節用集』の増加項目のうち三〇項目ほどであり、ほかにつぎのようなものがある(かつこ内が『早引節用集』の増加項目である)。

繁^{はん}花^{くわ}地^ち (繁花)
氏^し種^{しゅ}性^{せい} (氏種性)
光^{こう}陰^{いん}如^に矢^や (光陰)
修^{しゆ}羅^ら燃^{ねん} (修羅)

部門引きの節用集であれば、〈二揆〉を検索しようとする利用者は、イ部言語門の項目群から〈二揆起^{にがいけい}〉をみいだせば、〈二揆〉そのものがなくてもことはたりる。しかし、早引きの節用集では、イ部のかな見出し三字の項目群に、〈二揆^{にがい}〉がなければ、もはやそれ以上の手がかりはえられない。〈二揆〉をさがすために、この語が含まれている項目を予想して、さらにかな見出し四字以上の項目群を通覧しなくてはならないのであれば、それはすでに早引きという項目検索法そのものが意味をもたなくなっているということになる。早引きは部門引きとくらべて語形による検索法という性格がよくなっているだけ、逆に利用者の想定した語形と完

全に一致した項目以外は検索しにくくなっているといえる。

つぎに『早引節用集』の削除項目をみると、削除項目全体の半数ちかくにのぼる約百項目は、『蠡海節用集』で二つの門に重複してあげられている項目のうちの一方をのぞいたものである。たとえば、『蠡海節用集』では、つぎにあげるような項目がカッコ内に示した二つの門に重複して提出されている。

毎度（言語・時候）
幼氣（言語・人倫）
軒（言語・支体）
管（言語・器財）
穂（言語・草木）

これらの項目について、言語門にあげられたものは『早引節用集』の対応する位置にひきつがれているが、時候門・人倫門などにあげられていたものは削除されている。

『蠡海節用集』でこれらの項目が二つの門に重複して提出されているのは、意味による分類という項目検索法に由来するものである。どの門に所属するのか、判断にまよったり、あるいは同語形でも意味によって所属する門がことなりしうる項目については、利用者がさがす可能性のある位置に重複して項目を立てているのである。『早引節用集』は、意味分類という検索法から生じているこのような重複提出を不要と考え、一方を削除したのである。さきにも述べたように、『早引節用集』の項目配列には『蠡海節用集』からひきついだ意味分類のあとが残っており、このような重複提出の項目についても、意味分類のあとを積極的にいかすことも可能であった。それをしなかったところに、意味分

類を否定しようとする姿勢のつよさをみることができ（後述参照）。

部門引きから早引きへ

ここまで、『早引節用集』がどのようにして編纂されたのかをたどりながら、そこに早引きという項目検索法がどのように影響しているのか、その一端をみてきた。ここで、あらためて、近世初期の節用集から『早引節用集』が登場するまでをふりかえり、近世前期の節用集における項目検索法のもつ意味について考えておきたい。

室町時代から慶長年間にかけて成立した、いわゆる古本節用集には、項目検索法に言及した記事はほとんどみられない。近世節用集において、はじめて項目検索法にかかわる記事が多くあらわれるが、それらは、意味分類すなわち門のたてかたについて解説するものであった。寛永年間の『二軒節用集』（寛永九年刊）や『真草二行節用集』（寛永一五年刊）などに付されたそれらの解説は〈部分之名〉とよばれ、記述の精粗に差はあるものの、近世前期の多くの部門引き節用集の巻頭に付載されている。このような、節用集を利用する人にむけての手引きが加えられるということは、古本節用集のばあいとくらべて、編者と利用者との分離が生じていることを示している。節用集が版本として商品化され、利用者が増大したとき、節用集の項目がどのような原則にもとづいて分類、配列されているのかを明文化し、前もって知識として確認しておくことが必要になったといえよう。

近世節用集の利用者は、古本節用集の利用者とは質的にもこと

なつた範圍にまで拡大されていくが、その際、部門引きという項目検索法には、二つの点で問題が生じることになる。その一つは、部門引きが二つの基準によつて項目をいくつかの小集団に分類するにとどまるという点である。二つの分類基準によつて到達できるのは、各部の各門までであつて、そこにあげられた項目群からめざす項目をみつけたすためには、項目群の全体をみていくしかない。通覧すべき項目の数が多ければいい、その負担感は大いものになる。近世節用集の出発点となつた易林本節用集のばあい、言語門（言辭門）の項目数は、全項目数の約五三％にのぼり、その他の門については、項目全体を通覧することにさほどの負担はないが、言語門の項目を通覧して特定の項目の有無を確認するのは、部によつては、かなりの負担感をともなう。『早引節用集』のもとになつたと考えられる『蠡海節用集』でも、言語門に属する項目は全体の約六八％に達し、もつとも項目数の多いイ部では約五二〇項目となる。つまり、イ部言語門に含まれている可能性のある項目を検索するためには、五二〇項目を通覧することを前提にしなければならない。元文二年（一七三七）刊の『新增節用無量藏』がイロハわけを第二字目まで適用する項目配列法を導入したとき、それが言語門の項目にかぎられたのは、右にのべたような門別項目数の分布ということが背景となつてゐる。また、享保一二年（一七二六）刊の『万倍節用字便』や、さきにあげた『蠡海節用集』（寛延三年刊）、『字典節用集』（寛延四年刊）のように、言語門を先頭におく門配列がこころみられるのも、言語門に属する項目の多いことが一つのきっかけになつてゐるであらう。

近世節用集において部門引きから生じるもう一つの問題は、分

類基準のうちの一つである〈門〉が意味による分類だという点であつた。近世初期の節用集に、〈部分之名〉などよばれる意味分類に対する手引きが加えられることは、さきにのべた。だが、この〈部分之名〉は、それがくわしいものになればなるほど、増大した節用集の利用者層にとつては、前提として要求される知識をますことになるものであつた。『早引節用集』の巻頭には三条からなる〈凡例〉が付されているが、そのうちの二条には、つぎのようにしるされている。

一世二有ルトコロノ節用ハ乾坤門言語門等ノ部分十三門或ヒハ十五門ニヨリテ字ヲ搜ル然レモ部門繁キニヨリテ却テ混雜ノ事多シ

一此節用ハ部門ニヨラズ訓読ノ仮名ノ数ヲ以テ文字ヲ求ム急時ノ便ナルヲ他ニ異ナリ文字引様次ニ因ス

ここでは、早引きという項目検索法は、意味分類による従来の項目検索法と対置され、これにかわるものとして提示されている。かな見出しの字数による分類と意味による分類とは両立しえないものではないが、『早引節用集』の〈凡例〉では、意味分類の煩雑さがとかれ、これにかわるものとして早引きが位置づけられているのである。『早引節用集』の項目配列に、実際には意味分類があるにもかかわらず、それを項目検索に役だてようとしなかつたのは、意味分類によつていないことを強調するところに早引きの存在理由があると考えられたからであらう。

寛永年間以来、部門引きの節用集において、意味分類に関する手引きとして加えられたのが〈部分之名〉であつたのに対し、早引節用集において、かな見出しの字数によつて項目が分類されて

いることを説明した文章は、右に引用した『早引節用集』の凡例の第二条にもあるように、〈文字引様〉とよばれる。いずれも項目検索に関する記事ではあるが、〈部分之名〉^{ぶぶんのみな}には、節用集がどのように構成されているかという作りてがわの視点が残されているのに対し、〈文字引様〉は、節用集をどのようにひくかという使用てがわの視点に立っており、また節用集が〈文字を引く〉ものであるとされている。このようなところにも、近世前期をとおして節用集の利用者層がはばを広げてきたこと、そしてそれによって、節用集の辞書としての性格そのものに変化を生じてきたことがうかがえる。

おわりに

早引きという項目検索法が生まれた背景には、近世前期をとおして増大してきた節用集の利用者にとって、従来の部門引きのうち、意味による分類がわずらわしいと感じられるものであったということがあると考えられる。部門引きと早引きという二つの検索法の評価は、利用者層のちがいを考慮に入れたうえでなされなければならぬ。〈早引〉という呼称は、この節用集の編集あるいは出版にたずさわったものによって、商品としての価値づけという意図をこめて与えられたものである。実際に部門引きよりも早く項目を検索できるかどうかは、だれがどのような項目を検索するか、という条件によってことなるであろう。また、早くひけるかどうかだけが項目検索法に対する評価の基準というわけでもない。

本稿では、部門引きと早引きの項目検索法としての問題を中心

としたため、『早引節用集』の成立について、ふれることのできなかった問題も多い。その一つは、かな見出しの字数によって項目をわかつ、この早引きという方法がどのようにして考えだされたのかという問題であり、また、それを考案した人物はだれかという問題である。前者について、関場武氏は、〈早引〉という名称を含めて、『早引和玉篇大成』のなかの総画数順という漢字検索法に示唆をうけたのではないかとしている。⁽¹⁰⁾ 筆者は、そのほかに、部門引きの節用集において、門内の項目配列を漢字見出しの字数順としているものがあること、そして『早引節用集』がよつたと考えられる『蠡海節用集』がそのような項目配列をおこなっていることを指摘しておきたい。

早引きの考案者については、現時点では確認できない。関場氏は、『享保以後大阪出版書籍目録』などによって、『早引節用集』の編者を山下重政としているが、かりに山下重政が『早引節用集』の編者であるとしても、早引きの考案者としてよいかどうかについては、彼の伝記が不明ということもあり、さらに調査を必要とする。

注(1) 関場武〈宝曆新撰、増補改正、早引節用集〉『芸文研究』59(一九九一・三)

(2) 以下の検討は、国立国会図書館(亀田文庫)所蔵の宝暦一二年版による。

(3) 以下の検討は、国立国会図書館(亀田文庫)所蔵の天明六年版による。

(4) 近世前期の部門引きの節用集において、項目の配列変更を生じさせるもつとも大きい要因は、行末に位置する項目がつぎの行にわたらないようにすることであった。『早引節用集』の項目配列の変更にも、そうした傾向はみられるが、近世前期の部門引きの

節用集のばあいほど顕著ではない。

- (5) 拙稿『章書本節用集について』『国文学研究』83(一九八四・六)参照。

- (6) 早引節用集における項目増補がすすめられたとき、『十三門部分いろは節用集大成』(文化一三年刊)のように、頭字のイロハとかな見出しの字数による分類のあとに、さらに実際に門を立てて意味分類をおこなうものもあらわれている。

- (7) 拙稿『近世節用集の序・跋・凡例(一)』『国語学研究与資料』11(一九八七・一二)参照。

- (8) そのことが部門引きの節用集の項目配列を柔軟なものにしているのであり、項目検索法そのものとして劣っているというわけではないことはいうまでもない。

- (9) ちなみに、イ・ト部の範囲で、『蠡海節用集』の各門の項目数

言語	58.3	時候	3.4	乾坤	9.6
器財	7.5	官位	1.7	人倫	5.4
支体	2.9	衣食	3.7	草木	4.2
気形	3.3				

また、おなじくイ・ト部の範囲で、『早引節用集』におけるかな

新刊紹介

坂本清恵編

『近世上方アクセント資料索引』

(アクセント史資料索引十二)

本書は、近世前期・中期に成立した声点・胡麻章・声調表記のある上方アクセント資料についてまとめたアクセント注記付き

語彙索引である。

出典資料は、契沖仮名遣書、釈文雄『和字大観鈔』、京都大学附属図書館中院庫蔵『古今和歌集聞書』・『古今聞書』、同蔵『源氏清濁』。すべての資料について原本調査を行い、確実な声点や胡麻章を伝えるもののみ収録されている。

当時の上方アクセントの実態のみならず、

見出しの字数別の項目数の割合をみると、つぎのようになる(単位は%)。

一字	1.6	二字		三字	
四字	40.5	五字	11.6	六字	27.0
七字	1.9	八字	0.8	九字	4.3
(10) 注(1)に同じ。					

付記

本稿のうち、『蠡海節用集』と『宝曆 早引節用集』との関係についてのべた部分は、一九八八年から一九八九年にかけて、『新撰 早引節用集』の五十音順改編本を作成する過程で書きのこしたものに手を加えて稿をなした。一九九〇年三月発行の『国語学』160集に掲載された『近世後期刊用集における引様の多様化について』と題する論文のなかで、佐藤貴裕氏は、『宝曆 早引節用集』の原拠となった部門引き節用集として、『蠡海節用集』(寛延三)などが考えられる(24ページ、注3)としている。『新撰 早引節用集』と『蠡海節用集』との関連については、この佐藤氏の指摘が最初であることとともに、本稿がそれとは別に執筆されたものであることをおこわりしておく。

資料筆者のアクセント観やアクセント仮名遣に対する考え方をうかがい知るためにも利用価値の高い資料である。

なお、入手希望者は、アクセント史資料研究会(早大文学部秋永研究室気付)まで連絡されたい。

(平成六・三 アクセント史資料研究会
A5版 一八九頁 二〇〇〇円)

〔吉田 健二〕